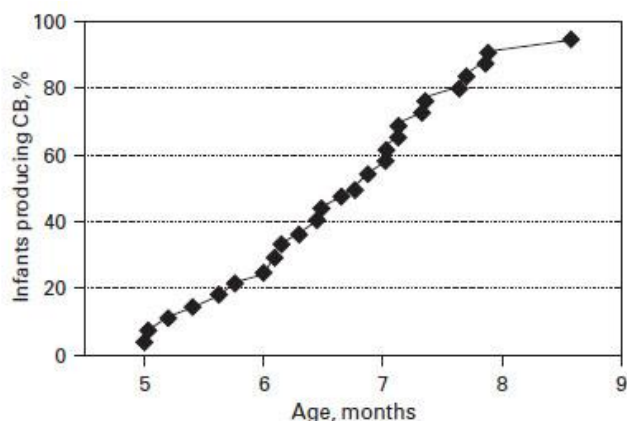


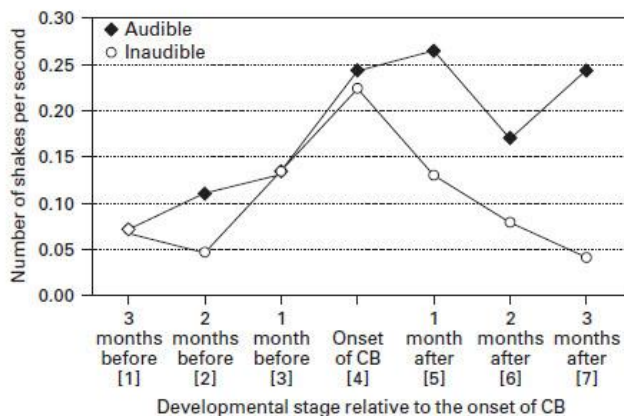
期待 84-喃語と ASD :

Ejiri (1998) *Phonetica*, 55:226-237.

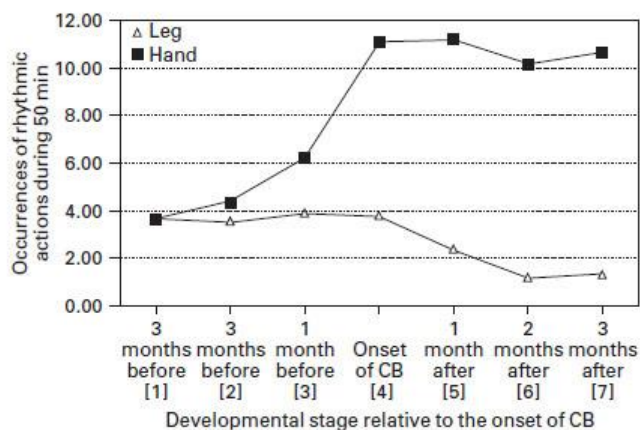
この論文は、5-9 カ月齢の定型発達の幼児で、標準的な喃語 CB の開始とリズムカルな運動の関係を検討した。上図は標準的な喃語を発した幼児のパーセントで、6 ヶ月 27 日齢を喃語の開始とした。中図は音の出る rattle とでない rattle を幼児に持たせたときの 1 秒当た



りの振った回数である。喃語の開始に向かって回数は増加する。喃語の開始前は音の出る rattle, 出ない rattle で差はないが、喃語の開始後は音の出る rattle を多く振るようになる。喃語の成立には聴覚の feedback が重要と言われているが、総合的な結果である。下図は 50 分の観察期間にリズムカルな上肢と下肢の運動の出現頻度である。上肢の運動は喃語の開始時期に頂点に達し、幼児はその頻度を持続させる。



Ejiri & Masataka (2001) *Develop. Sci.*, 4:40-48 はリズムカルな運動と音声の関係を検討している。喃語が開始する前に、リズムカルな運動と音声共起する頻度が高まるが、共起した時としない時の音声の特性を分析している。共起した音声は持続が短く、フォルマント変移部の長さが短かった。これらの特徴は喃語を特徴づけるものでもあり、リズムカルな運動と喃語の密接な関係を示唆する。



喃語出現前のこれらの行動を、運動の微細構造を含めて、ASD で検討する必要がある。Teitelbaum は ASD の運動の左右非対称を問題にした。ビデオ記録の詳細な分析に加えて (適当な動作解析ソフトがあるだろう)、動作によっては感圧素子などを利用できないだろうか。